

海部の地理(四)

— 臼杵と佐賀関 —

矢野 彌生

(会員・佐伯市中山区)

東神野の山地集落

集落の立地

臼杵市の南端に位置し、東は津久見市の八戸(やと)、西は臼杵川を境に大野郡野津町、南は南海部郡弥生町宇藤木に接している。

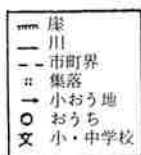


図10 東神野の位置と地形

東神野の山地集落は八戸高原の南西、姫岳の南斜面、標高一五〇から三八〇メートルの間に、中心集落の宮本など五つの集落が立地しており、平地に恵まれない。このため、宮本ではドリリー⁽¹⁾に集落立地を見るものが多い。地質は秩父古生層で、東神野付近は見掛け上一九〇メートルの厚さの石灰石鉱床があり、「ひとぼし鍾乳洞」をはじめ、多くの洞穴が散在している。

また、東神野にある熊野神社は、上・下の宮に分かれており、下の宮は通称太り権現と呼ばれ、その社地は宮本地区の中央にあって、一段と低い、二段歩程のドリリーネの一隅に祀られている。御神体は高さ五メートルほどの石灰岩でこれを覆って神殿がある(熊野神社は紀州の熊野神社から勧請したもので、創建は久安元年一一四五といわれる)(2)。

東神野に集落が成立した時期については、資料がないため正確を期すことは出来ないが、臼杵市の郷土史家高橋長一氏は、鎌倉期か室町期かにこの山地に移住者があり、集落が成立したのではないかと推論している。また『臼杵小鑑』には、



東神野の集落

「神野、東西に分ち、東は海部郡臼杵荘に属し西は大野郡宇目（実は野津郷）に属す。始は河野に作る。当太守御入部以来、河の字をいみて神の字に改むと云（或は香の字正説なり）」とある。

東神野の行政上の経過を見る

と、明治四年（一八七二）廃藩置県により臼杵県になり、同二十二年の市町村制施行により、北海道郡上南津留村所属となり、同四十年中臼杵村を合併した南津留村に所属し、昭和二十九年（一九五四）臼杵市に編入される。

過疎化の進行

我が国では、昭和三十年代後半から経済の高度成長に伴い、地方から大都会への人口流出が激化し、大都市での過密化現象が生ずるに至った。

全国の過疎地域の人口減少率を見ると、昭和三十五年から四十年までが一・二・九％、四十年から四十五年までが一・三・六％、四十五年から五十年までが八・八％、五十年から五十五年までが三・七％、五十五年から六十年までは三・一％と、減少率は明らかに鈍化している。

いま、東神野の昭和三十五年から五年ごとの人口及び減少率を見ると、表8のとおりである。

昭和三十五年から四十年までの五年間が七・三％、四十年から四十五年までが一・七％、四十五年から五十年までが二・三・九％と最高の減少率を示し、五十年から五十五年までが一七・九％、五十五年から六十年までが



太り権現の鳥居

ると、地滑りのな人口減少が続いており、人口減少に全く歯止めがかかっていないことが分かる。

土地利用と
シイタケ栽培

東神野の主産業はシイタケ栽培で、
専業九戸、兼業が少しある。昭和六

二〇・〇%を記録し
鈍化の兆しは見えず
依然として高い人口
減少率を示し、辺地
の山地集落の厳しい
生活を物語っている。

一方、世帯数を見ても、昭和五十五年
から六十年の五年間
に一五・〇%の減少
率を示し、挙家離村
が依然として停止し
ていない。また、図
11で東神野の総人口
・世帯数の推移を見

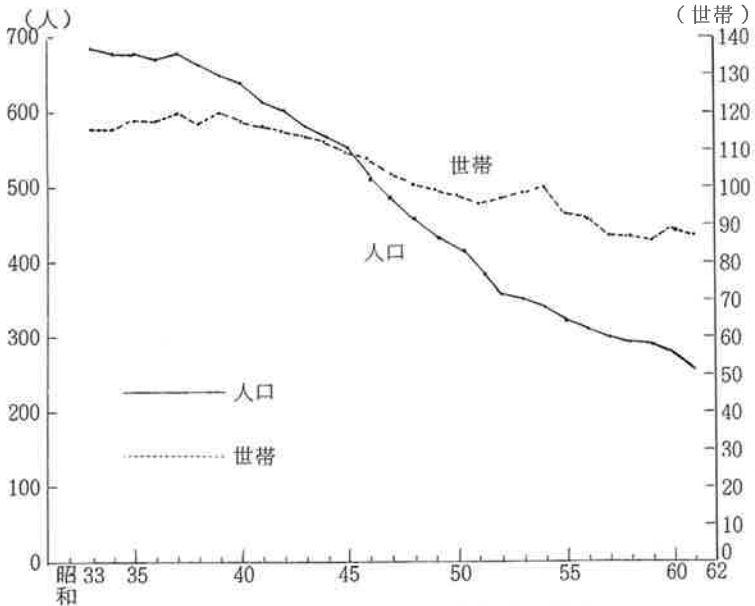


図11 東神野の総人口・世帯数の推移
(白杵市提供資料により作成)

十一年（一九八六）のシイタケ生産額は生シイタケは四トン、金額にして四百万円。乾シイタケ三十五トン、一億四千万円となっており、原木は県内各地から仕入れる。また、竹の子は四百トン、四千五百万円の生産がある（昭和六十一年）。

その他、東神野には、古くからの伝統のある竹製品の製造がある。かつて、神野名産の竹製品にも受難の歴史があったという。即ち、藩政期までは村を取り巻く山地は藩のもので保護された山もあったが、概して寛大に扱われ、自由に伐採し、薪や木炭を製造し、生活必需品との交換もできる重要な村の産物であった。

しかし、明治以後、多くの山地は国有林となり、一切の伐採を禁じられたが、村人の多くは藩政期の慣習に従って、ひそかに伐採して生活を立てていたが、遂に全員捕らえられて罰せられたという。これ以来、村を取り巻く山々は村人ののろいの山となり、生活の道を断たれた。

そこで、生活の資として、津久見の青江から竹細工の上手を招いて、ザル作りの講習を受け、竹は大野郡から移植して竹の栽培に努めてきた。

しかし、全戸がこれで生計を立てることは難しく、遠

く大野郡からトラックで原料の仕入れをし、一家総かりで製造したという（3）

現在、竹製品作りは竹林の枯死と需要が少なくなったことから、老年層の内職程度となっている。

東神野の土地利用を見ると、表9のとおり経営耕地は三九・五ヘクタールで、

表8 東神野の人口

(単位：人、世帯、%)

年	昭和	35	40	45	50	55	60	増 減 率					
								40/35	45/40	50/45	55/50	60/55	60/35
人口	674	625	552	420	345	276	△7.3	△11.7	△23.9	△17.9	△20.0	△59.1	
世帯	119	118	109	101	100	85	△0.8	△7.6	△7.3	△0.9	△15.0	△28.5	

(「臼杵市統計書」により作成)

表9 東神野の土地利用（昭和60年）

（単位：ha）

区分 集落	経営耕 地面積	田	畑	保 有 山 林	原 野
下忠野	7.8	1.1	6.7	7.8	2.5
上忠野	8.3	1.6	6.7	6.6	2.6
上宮本	10.0	1.5	8.5	18.4	12.5
下宮本	6.9	1.6	5.3	7.6	6.9
川原内	6.5	1.1	5.4	19.4	1.2
計	39.5	6.9	32.6	59.8	25.7

（臼杵市資料による）

一戸当たり〇・四ヘクタールと零細経営である。うち、水田が六・九ヘクタールあるが、下宮本の柿の木地区などの谷間に少し分布しているにすぎない。水田は他地区の南津留や臼杵方面にあり、出作り耕作をしている。畑は山地の傾斜地にあるが、現在は耕作放棄されている。

表10 東神野の通勤者数（昭和63年）

（単位：人）

産業 別 通勤先	第一 次 産 業	第二 次 産 業	第三 次 産 業	計
臼 杵	—	10	14	24
津久見	1	36	3	40
大 分	—	2	7	9
計	1	48	24	73

（臼杵市資料による。統計は昭和63年7月現在）

多い他地区への通勤人口

ものが多く、わずかな野菜も店から買ってくる消費地となっている。

東神野地区からの他地区への通勤者を見ると、表10のとおりである。

通勤者総数七十三人のうち、津久見市への通勤者数が四十人で、全体の五四・七%を占めて、圧倒的に多い。通勤先の職業を見ると、津久見市の場合は津久見市の企業の代表である石灰関係の第二次産業の従事者が多く、臼杵市への通勤者は第三次産業、即ち、サービスの従事者が多い。東神野では、一世帯当たりほぼ一人の割合で、他地区への通勤者がある

ことになる。このような状況について宮本小学校の『学
校要覧』では、

東神野の朝のサイレンは五時に鳴る。他地区の人々より一時間早く起き出して、早出番の人は六時過ぎ、普通の人でも七時過ぎまでには親達も含め、殆ど神野を後にして津久見・臼杵・鶴崎方面に働きに出掛ける。文字通り星を仰いでの厳しい生活なのである。当然、親子の対話不足。子供達は帰宅しても鍵っ子か、祖母のもとでテレビを見るとか、数少ない友達と遊ぶとか……。ある意味では、これが現在における厳しい風雪の試練とも云えるであろう。

と、辺地の山地集落の生活の厳しさを伝えている。

交通と生活圏

交通路は高い所から低い所に移るといわれるが、昔は、山地の集落にあっては、尾根伝いの見晴らしの良い峠道を通して、他の集落と往来していた。現在では、尾根から谷間に近い所に交通路が開かれている。

標高一五〇から三八〇メートルの山腹斜面に立地している東神野の交通路の変遷を見ても、交通路が高い所か

ら低い所へ移っていることが分かる。

東神野から他地域への重要な交通路は、図12に示すように、姫岳から鎮南山へ続く峰伝いに通り、望月―田井ヶ迫―福良へ下がっていく道と、八丁坂から乙見―弘川を経て臼杵の町へ出るコースがあった。また、野津市へは柿の木坂から西神野―八里合へ出る道と、西神野から川登へ出る二つのコースがあった。更に東神野と生活関係の深かった津久見の山地集落の八戸へは川原内から山道が通じていた(図12参照)。昔は、津久見の青江から川原内越(標高約四〇〇メートル)を通り、ミカンを牛馬の背に載せて行商人がやってきたという。

しかし、道路の改修も進み、臼杵川の崖上に開かれた道路(現在の県道津久見―野津線)によって、昭和三十四年(一九五九)に待望の定期バスの運行が始まった。当時の『市報うすき』(昭和三十四年二月十日号)には、

東神野に十二月二十五日公衆電話が敷かれ、二月四日には定期バスの開通が実現して、相次ぐ文化の恵に地区民の顔は明るい。これは地元の熱意と努力によって実現したものであって、この二つの開通により、交

通難は解消され、都市部との距離が狭められ、産業開発・緊急連絡などに大きな恩恵をもたらすことであろう。

なお、このバスは、白杵発午前七時四十分と、午後二時三十分。神野発午前九時と午後五時五十分の一日二往復運行する。所要時間一時間十分。距離は、片道一七・七キロメートルで、料金は七十円。また、野津

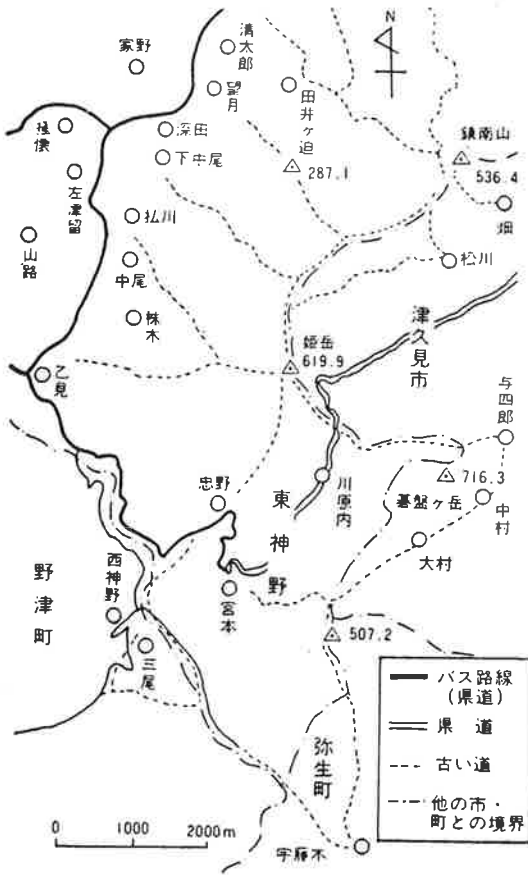


図 12 東神野の交通路

—東神野間（一二・四キロメートル）も運行を始める。と、東神野地区民の努力と熱意で実現したことを伝えている。

現在、白杵駅から宮本まで二往復、五十分で運行しているが、マイカーの増加や村の過疎化の進行に伴い、旅客が減少して運行が危ぶまれており、今後の成り行きが注目される。

八十五戸の東神野の集落の消費生活の実態を見ると、地区内に三軒の商店があって、雑貨・米・酒・塩などを販売している。また、白杵・津久見への通勤者が多いため、生活用品の通勤先の商店での購入も見られる。特に高級品や食品・日用雑貨など、白杵の市街地で購入する者が多い。

表 11 東神野の生活環境

区 分	施設整備状況	備 考
交通・通信	公衆電話施設	昭和33年 12月
	自動ダイヤル式（電話）	昭和57年 2月
飲 料 水	東神野に定期バスの運行始まる。	昭和34年 2月
	東神野道路改良舗装工事竣工	昭和48年 12月
	簡易水道施設	昭和28年 3月 (川原内のみ) 昭和32年 3月
医 療	内科住民検診（老人保健法に基づく）年 4回 昭和61年以降	
	歯科住民検診 年1回	
	学校対象の予防接種 年7回	
し尿・ゴミ 処 理	し尿……ほとんど自家処理	
	燃えるゴミ……自家処理	
	燃えないゴミ……（月1回回収）	
集 会 施 設 教 育	東神野集会室完成（木造平屋建 178 m^2 、 工費 231 万円）	昭和 38 年 5 月
	宮本中学校増築工事（鉄筋 2 階建 703 m^2 、 工事費 2,080 万円）	昭和 44 年 4 月
	宮本小学校増改築工事（鉄筋 2 階建 428 m^2 、工費 1,500 万円）	昭和 47 年 3 月
	同 上 プール竣工	昭和 51 年 4 月
	宮本小学校は、明治 11 年（1878）開 校。当時学令人員 67 人であったが、そ のうち就学したのは 23 人であった。昭 和 63 年現在で小学校 7 人、中学校 6 人。	

（『市報うすき』・『宮本小学校百年誌』〔昭和53年〕などにより作成）

また、一週間に一回津久見市から移動販売車（雑貨・食料品）が来ているし、南海部郡の蒲江からは月一回、鮮魚の販売車が定期的に出張販売している。

東神野には娯楽施設が皆無であるが、冬の間、シイタケ作りなど仕事の合間をぬって猪を追い、猟を楽しむ山男達もかなり多い。猪が獲れた時には、猟に関係ない人でも、日頃懇意にしている多くの人々が集り、夜遅くまで猪鍋を囲みながら歓談が続くという。また、毎年四月十二日の「太り権現」の祭礼には、県の重要無形文化財に指定されている風流杖踊りがぎやかに、地区民総出の中で奉納される。



注 (1)

ドリーネはスラブ語の意味は谷。国際的にはカールスト地形における凹地のうち円形に近いものをいう。直径十メートルから百メートルくらいまで、深さはそれに相応する。降雨による溶食と、地下水系の部分的陥没によって形成される。ドリーネの底にはポノール（吸込み穴）がある場合が多い（『地理学辞典』日本地誌研究所 昭和四十八年）。東神野の宮本地区にもポノールが認められる。また、写真に見る太り権現の前の鳥居は一メートル近くも埋もれてドリーネの埋没状態を知ることができる。

(2) 太田重澄『寺社考』寛保元年（一七四一）。

(3) 高橋長一『神野探訪』（『臼杵史談』五二号 昭和三十五年）。